

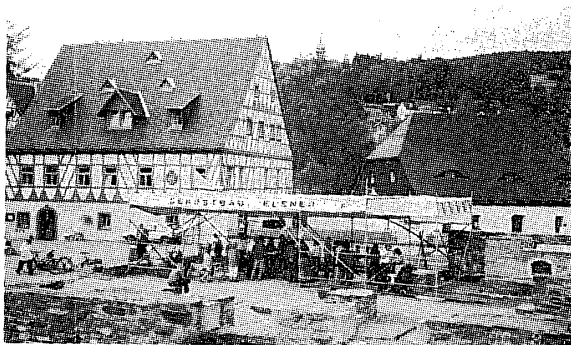
Drechsel Symposium・2000に参加して

林 哲 三

第1回国際木工ロクロ・シンポジウムは、2000年8月2日（水）午前9時ドイツ連邦共和国ザクセン州オルベルンハウ市の会場広場で、世界12ヶ国からのロクロ師とドイツの各地や地元の関係者や参加者約300名の人々を集め、その成果が大きく期待されるなか、盛大に開会の時を迎えた。

開会式が行われたのは、メイン会場ザイガー・ヒュッテングレンデ・オルベルンハウ・グリューンタール広場。ここはオルベルンハウ市の市街地から5km程郊外にある所で、中世の非鉄金属冶金学関係の資料や建物が保存されている史跡である。その広場のテントの中で、オーストラリア、ニュージーランド、イングランド、フランス、オランダ、スイス、オーストリア、日本、ドイツなど各国の木工ロクロ師や多くの開催関係者が集い、なごやかに歓談するなか行なわれた。私も大勢の人々の一員として、これから行われる催し物や木工ロクロ実演の期待と自分が実演することの不安感が入り混じった気持ちで、式が始まるのをいま遅しと待ちわびていた。

初めに、このエルツ地方の民族衣装を身に



着けた音楽隊のマーチの演奏が開会の雰囲気盛り上げる。引き続き司会者から、ザクセン州首相の代理として、クリスティーン・ウェーバー大臣、オルベルンハウ市長のシテフエン・ラウプ博士、エルツ中央貯蓄銀行頭取の順で紹介があり、それぞれの方々の挨拶が続いた。挨拶ではこのシンポジウムがこの地で開催されることの意義、外国の木工ロクロ師と地元の木工芸製作者との掛け橋となることの期待、またこの地方における木工ロクロ産業の歴史や現状などが語られた。そして最後に貯蓄銀行頭取から、シンポジウムの責任者であるロルフ・シュタイナート氏に今回のプロジェクトに対する資金融資の目録が手渡された。

オルベルンハウは、現在の統一されたドイツ連邦共和国の中では東の端に在り、ザクセン州の州都ドレスデンから西南へ約75kmの所に位置し、エルツ山地と呼ばれている地方のほぼ中央にある。

この町の東側は、小さな川を挟んで、隣国のチェコと国境を接している。

エルツ山地は高い所でも海拔800メートルほどしかなく、刈り取った後の茶色の麦畑や放牧のための草原、トウヒやカラマツ、モミなどの針葉樹またナラ、タモ、カエデなど広葉樹のこんもりした森や林、道路沿いには、ボダイジュやトチノキ、などの並木が続く。そして、人工的な茶色や緑の斑模様の景色が、なだらかな山並みに沿って見渡すかぎり続くなか、ひととき高く尖った教会の屋根を中心

にレンガ色した屋根の家並みがひとかたまりに連なり、あちらこちらに集落として点在する。

この風景は、アルプス山地を除いたヨーロッパ大陸の国々に見られる。特にドイツは樹木を大切に思う心で森や林をつくり、そしてそれを培ってきた。そして、ドイツには過去に、人と森とにおける、利用と育成の厳しく長い歴史があり、そのことが町の景観や日常生活のなかであらゆる所に、樹木や木材との関わりへの配慮となって表われている。例えば車道と歩道との間、また小さな公園にも多くの樹木が植えられ、その日陰の下でコーヒーなどを飲みながら人が憩う姿をよく見かける。また駅や、公園などの公共施設においても、ベンチ、手すりなど木材を使用できる個所は極力、木材が利用され、さらに食事に使用する食器類、テーブルや椅子、棚や収納家具の類にも木材へのこだわりは日本より強いように見受けられる。このような事柄からも、木工ロクロ・シンポジウムがドイツで開催された理由が伺い知れる。

オルベルンハウは、現在人口約12000人で、海拔450mのところの在り、小高い丘陵に囲まれ、町の中央には小川が流れ、その谷あいの平地にこじんまりと家々が寄りそっている感じの景観を持つ閑静な町である。町の中心部はほとんどが二、三階建てほどのレンガや石造り。木の枠を表面に出した昔ながらの切妻屋根の家やホール、工場、倉庫などの建物が石畳の道路沿いに連なって並んでいる。その中心部に一際高く尖った屋根の鐘楼をもった簡素な造りの教会があり、その周辺には木々の茂った公園が広がっている。またこの町には、エルツ地方で最も大きな都市ケムニッツからオルベルンハウの約10km先のネウハウゼンまで鉄道が敷かれ、一日に4本ほどの列車が通っている。そして町の周辺部には、各国の自動車メーカー販売店や木工メーカーの工場や事務所など現代的な建物が点在して

いる。

15世紀頃この町は銀、銅などの非鉄金属冶金鉱業の中心地的役割を果たしていた。採掘・精錬された銀は貴金属製品や食器製品に加工され、銅は宗教的な建物、大聖堂などや、ホールの建物の屋根を葺く材料として盛んに使われ繁栄を続けた。しかし、それも長くは続かず、産業革命後はしだいに衰退していった。

このエルツ地方に住む人々は、古くから畑を耕したり牧畜などの農業や森や林などで働く傍ら、余暇に豊富にある木材を使い日常生活で使用する道具類や工芸品を作り生計の足しにしていた。その中に木工ロクロ製品も含まれていた。木工ロクロ技術は、他の地方から導入された物でなく、もともとこの地で盛んであった採鉱冶金産業のなかに技術的な要素として含まれていた。鉱山から採掘した鉱石を、川の水を利用して水車を回しその回転の動きを上下運動に変え、臼の中で細かく砕き、そして熱を加えて精錬される。この水車の回転機構を利用して、木工ロクロの技術が考え出されと推測される。

繁栄をもたらした冶金鉱業にも陰りが見えてきた19世紀頃から、オルベルンハウでは木材を用いて生活用品の家具や器物、玩具などをつくることが盛んに行われるようになった。その中で、ヘルマン・カーデンや優れた木工ロクロ職人たちなど、木工ロクロを専門とする人々が現れ、次第に盛んになっていった。19世紀後半には、他の産業同様に電力を使用するようになり、一段と生産量も向上していった。その後、後継者にも恵まれ、家具の飾り縁、階段の頂飾、つけ柱、鏡やソファの装飾、タンスや机の脚、など多様な範囲に広がっていった。第1次、2次世界大戦の最中においても、オルベルンハウの銃器工場では不要になった銃床の廃材であるクルミ材などを使い、木工ロクロ職人たちは玩具や鉢、皿、盆、コースター、蓋付きの小容器など平和的

日用品を作っていたのである。

第2次世界大戦後、このエルツ地方は、東ドイツになり1990年東西ドイツが統一されるまで共産主義社会の政治体制が続く。1950年代に起こった最初の経済再建期に、東ドイツの政治方針は手工業者たちに対して、地域の同業者のつながりのなかで生産共同組合を設立する勧告をした。1958年、オルベルンハウのロクロ細工マイスターたちは、生産共同組合「オルベルンハウ・ロクロ細工工房」を設立した。この熟練したマイスターたちは独自の販売戦略の構築、すなわち国内市場と同様に高度に発達した資本主義的工業国への輸出をも目的とした戦略を考えていた。

ライブチツヒで行われるグラシー・メッセ見本市で円熟したデンマークやスウェーデンの優れたデザインや極上の材料を使用した家具に触発され、外国の木材たとえばイロコ、カムバラなどアフリカ産の物を輸入し、利用した。そして耐久性のあるイロコ材から製作したロクロ細工人形は卓上容器としても評判がよく、外国の輸入業者もそれを認めた。その後ロクロ職人の中からマイスター試験に合格する者も多く出て、1988年には83人のロクロ職人を数えるようになった。そしてオルベルンハウのロクロ工房は熟練したマイスターたちにより教育熱心な組織となり、遠くドレスデンやオーバーバーレンブルグからも学びに来る者もいた。しかし、1990年10月、東西ドイツの再統一で社会経済構造改革は、この共同組合の解散という結果をもたらしたが、それまで培われた木工技術は絶えることなく、今日まで継承されている。このような経過をたどり、今日のオルベルンハウでのあらゆる種類の木工芸メーカーや木工ロクロ職人やおもちゃの製造業者はこの町の産業や経済に不可欠な部分となった。そしてこの町にエルツ山地工芸家の協会やおもちゃ製造業者連盟の本部が置かれている事実は、豊かな伝統技術と確かな経済に育まれていることを表し

ている。オルベルンハウの中心にあるティボリ公園の道路に面して立ち並んでいる切り妻屋根の二階建ての建物の一角に、この町の歴史を紹介した博物館がある。ここには、オルベルンハウの周辺の自然、自生している樹木や草花などの植物、また生息する動物などの展示品、13、14世紀盛んであった銀や銅の採鉱の歴史を現した、当時の建物や大型施設の模型、実際使った鑿やハンマーなどの工具類また冶金に使用した道具類などと、1800年代からこの町で盛んになった木工産業に関わるものが陳列されている。

また隣接する町ザイフェンは、木製おもちゃを作る町として世界的に有名な町である。ここで作られるおもちゃの中でも、てっぺんにプロペラを付けたクリスマスピラミッドは、18世紀頃のクリスマスでは唯一の飾りであった。最初の頃は花を飾った植木鉢やろうそくを灯しただけの簡素なものだったが、19世紀に入るとクリスマスツリーと共にクリスマスピラミッドの飾りは華やかになり、ザイフェンの長い採鉱の歴史を物語る場面を形づくったものやクリスマスにちなんだ物語のおもちゃの人形などが飾られるようになった。町のメインストリートや路地を入った奥にも玩具や飾り人形を売る店が並んでいる。それぞれの店内には伝統的な形を持ちつつ、店ごとに個性のある店飾りや特徴のある人形やおもちゃ、また人の背丈以上の人形や民家の屋根にも届くほどのクリスマスピラミッドなどが、個性豊かに店内外いっぱい陳列されている。また、家々の窓や標識など到る所に飾り人形のモチーフや花束が飾られ、町全体が多くの樹木に囲まれていることも加わって、他の地域とは異り、こじんまりと落ち着いた和やかな雰囲気醸し出しだしている。そして家々は、森に囲まれメルヘンの世界に包まれているような風景である。またこの町には木工ロクロ細工専門学校が在り、多くの若者が木工ロクロのマイスターを目指して学んで

いる。

目をシンポジウム会場に移すことにする。ロクロの実演会場は5箇所に分れ、6~7人が、昔の工場の建物の中で、最新の木工ロクロ機械を使い各自の趣向を凝らした作品を制作する。そして、一般の見学者たちは、それぞれの実演者の場所に集まり質問を交わしながら、木材が削られて形になる様子を眺めている。

私の隣の実演者は地元のまだ若いマイスターで巧みに刃物を使い器を作っていく、またその横では、オーストラリアから来たテリー・マーティンが直径30cm長さ40cm程もある木材を回転させ、バリバリと物凄い音を立てながら削り、器を造る。材料に対して、刃物を当てる角度は、我々の方法とは異なり上向きで、材料の固定も左右両方から中心を支えて固定する方法が用いられている。

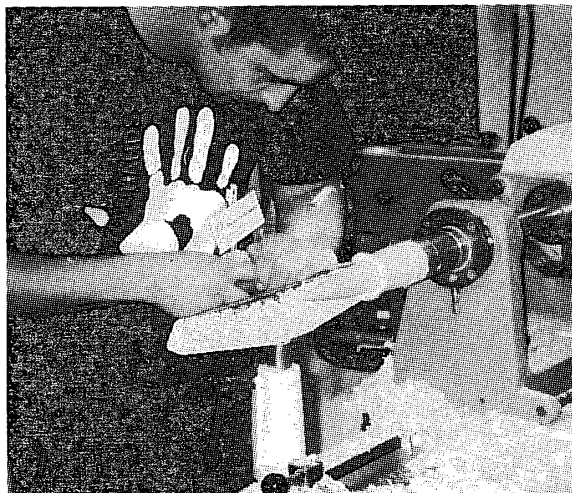
他の会場では各自が得意の技術を披露している、小さな蓋物の容器を作るベテランロクロ師、ライトの光が透ける程薄い器を作る人、また器の側面に溝を付けそこに金属の錫を固着させて装飾とする技法を見せる人など、様々な技を紹介している。

私も、用意されたロクロ機械を普段使っている椅子式に改良してもらい、刃物を置く台を新たに作り、用意されたタモ材でお椀を制作した。なぜ椅子に座ってやるのか、刃物はどこで手に入れるのか、作っている物は何に使うのか、といったことをドイツ語で質問を

受けたが、それらの質問は通訳の人がいろいろ手振りなどを交えて説明してくれた。そして完成したお椀を皆さん大切なものを包み込むように手に取ったりして眺めていた。そのお椀は地元の木工ロクロ専門学校の学生や観客に記念として、プレゼントをした。

また会場広場の真中にはテント張りの場所があり、そこでは古代ロクロの実演が行われていた。紀元前300年頃のエジプトの壁画に見られるロクロ作業のレリーフが現在歴史的に見て最古のものとされている。中心の軸が縦型ロクロ方式で片方が綱を引いて軸を回転させ、もう片方で刃物を当てて削っている様子が残されている。時代が下り、ヨーロッパで、文献に残されているものでは、木の枝の弾力を利用し中心の軸を横位置にし、足でペダル踏む形で回転運動を起こす方法がある。また横軸に、弓状に張った紐を数回巻きつけそれを前後に動かすことで軸を回転させ、その軸に手と足の指で固定した刃物を当てながら削り、椅子の脚のような棒状のものを作る方法もあった。日本では、弥生時代の後期から明治の初期まで一人が主軸に巻き付けた綱を引き片方が刃物で削る二人引きロクロ形式で行われていた歴史があった。現在では、電動力で主軸を回転させているのでこの様な方法では行われていない。

古代ロクロの実演者イギリスのロン・ウッドは、古代ロクロの学術的研究テーマの中で文献をもとにして実用の木工ロクロ機械を復元した。そしてそれを使いこなす技をも習得し、このシンポジウムで観客に披露していた。使用する刃物もいろいろな文献を参考に、独自で鍛造し使用している。刃物の形は現在の木工ロクロで使用している平バイトと違い刃先は深いカーブ状に湾曲している。これは日本の木工ロクロの刃物と類似している。実演は、器を造る材料の中心を左右から軸棒を使って挟んで固定する。そして軸棒に巻きつけた上下の紐を木の枝の弾力と足でペダルを踏



む方法を使って引っ張り器の材料を交互に回転させ、棒状の鋼に長い木製の柄を付けた刃物を脇に抱えて巧みに切削角度を調整しながら削り、器を造って行く。これはまさに、からだ全体を使った「もの作り」と言えよう。

この様にして造られた物は、現在の高度な木工ロクロ技術でつくるものや洗練されたものと比べ、素朴で一味違った親しみのあるものを感じさせる。それは、いわゆる手仕事の原点と言えよう。この様に、現在までに至った木工ロクロの歴史的経過を知るという意味において、古式ロクロの復元、実演は興味深いことであるとともに大切なことであると思う。



また同じ広場の一角では、子供たちを対象にしたロクロの体験コーナーが設けられている。これからのロクロ職人を目指して一生懸命、回っている木に耳搔きのような小さな刃物を当てて削っている。時々刃物の先が木に食い込むが、すぐに回転が止まる安全な仕組みになっている。ドイツの教育制度は、15歳まで義務教育であるが、5年目から、ハウプトシューレ（卒業後、就職して職業訓練を受ける者が入学する。通常5年制）、実科学校（卒業後、上級の職業専門学校へ進む者や中級の職に就く者が入学する。6年制）、ギムナジウム（将来、大学進学を志望する者が入学する。9年制）に分かれる。どのコースに

進むかは学校と親とが相談して決める。この様に年少の頃から将来の方向を決めて進む。さらに、それぞれその上の教育機関、ハウプトシューレを卒業し就職してから学ぶ職業学校。また実科学校を卒業して進学する上級の職業専門学校などがある。しかし近年はこの方向への進学者は減少しているということだ。

ドイツでは、古くから各職種にマイスター制度があり、今も確実に息づいている。そして職業専門学校卒業後、それぞれの専門分野において独立して職業しマイスターになるには、さらに高度な職業と技術を身につけ、マイスター試験に合格しなければならない。これによってその職業に対する社会的、経済的地位が保証されている。

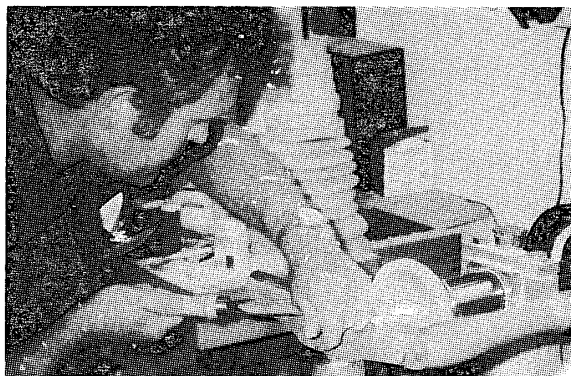
マイスターの資格と仕事の領域は一般のものとは区別され、仕事内容によってもその範囲が確立されている。このことにより、賃金の面においても資格の有無で、格段に差があり、高度な技術の習得とその職業に対する責任そして後継者の養成や指導が義務づけられている。

やはり何処の産地でも後継者の問題は深刻のようであり、子供の頃から僅かずつでも興味を与え、将来に繋げる期待を模索している。そして過去から伝えられたものを作る方法をもつて体験させて示すことは重要である。

別の建物には、オルペルンハウも含まれているザクセン州唯一の工芸関係の大学である、ツヴィッカウ大学応用芸術学科木材造形専攻の学生の学習課題のデザインパネルと制作作品が展示してある。作品は、「動き」をテーマとし、例えば風にたなびいて動くとか、回転して動くなど各自の独創的なアイディアで主に木材を用い立体構成した作品である。もちろん要所にはロクロで作った回転体がいわれている。また回転体による自由な発想とアイディア豊かな造形立体の作品も展示され、ドイツの造形教育の一端を知ることが出来た。さらに他の建物には、このエルツ地方

の動植物などの自然環境、鉱業産業の歴史、伝統工芸品の製作実演、木彫人形・木器を初めとしてカット模様のガラス製品、組紐やレース織物などの紹介が行われていた。

会場の入り口近くの建物では、現在この地域での最も重要な木工産業である玩具、人形の製作が行われていた。地元のマイスターやその卵たちの実演の場である。ザイフェンの木工ロクロ専門学校の学生、この道40年のベテランや20年の中堅のロクロ師による経験や



熟練度の異なる実演を見ることができ、興味深かった。

オルベルンハウの中心部のかつて騎士領があった敷地の建物は、今回参加した各国の実演者の制作品展示になっている。地元の作品を含めて135点のロクロの技術を駆使した逸品が陳列され、今まで書籍などの資料でしか目にしたことなかった外国のロクロ製品を一同に観ることが出来たことは、今後の制作に大変参考になると同時にバラエティーに富

んだ形や用途の作品に感動をした。

シンポジウムの最終日、8月5日土曜日午後6時、「ティボリ・コンサート・ダンスホール」で、参加者や関係者が大勢集まった中、このシンポジウム計画責任者ロルフ・シュタイナルト氏から展覧会の受賞者への表彰と外国からの参加者及び開催関係者に対してこのシンポジウムの開催が多くの人に認めら、大きな反響を得られたことなど感謝の言葉があった。そしてお互いにも事を成し終え充実した雰囲気のなかで閉会した。

以上のように、ドイツの一地方であるオルベルンハウやその周辺地域が国や州の協力を得て、歴史的経過や現在の社会情勢を踏まえ自分たちがこれからどの様に進むべきか、いろいろな方法を模索するなかでこのシンポジウムが開催されるに至ったことを強く感じた。4日間の短い体験であったが、次第に衰退していく感のように言われているこの木工ロクロの世界であるが、長い歴史と先人たちが培ってきた木工ロクロの伝統と技術は、洋の東西を問わず受け継がれていることを目の当たりに見聞することができた。私はこのシンポジウムに参加し現在まで木工ロクロを続けてきたことに改めて自信と誇りを持つことが出来た。そして皆、未来に向かって何としても生き抜いて行かねばならないと一生懸命頑張っていることをひしひしと身を感じた。